

岡本信広著

『中国の地域経済』

——空間構造と相互依存——

日本評論社 2012年 iii+264ページ

モウ
孟

ボウ
渤

はじめに

中国は世界経済を牽引する最も重要な成長エンジンのひとつとして広く注目されてきた。この成長エンジンがいかにして中国経済のダイナミズムを作り出したのかを理解するためには、エンジンを分解し、各パーツである構成要素、つまり地域・産業の相互作用、メカニズムを分析する必要がある。本書は伝統的な「ポイント経済学」的アプローチの限界を指摘しながら、空間的に「フラット」ではない中国の地域経済および地域間・産業間の相互依存関係を解明することを目的としている。核となる内容は、中国の各地域の経済を一国経済あるいはグローバル化する地球規模の経済という空間全体から鳥瞰するようにみて、地域経済の相互依存や地域経済と一国経済および国際経済とのつながりを意識して分析したものである。特徴としては、国内空間では中核-周辺という二項対立する相対的概念を用いて、国際的な空間では海外を取り込んだ三層構造のもと、最新の地域間および国際産業連関モデル・データがうまく利用され、中国の地域経済発展の状況を整合的に解説し得たことである。

本書の著者は日本における中国経済、地域開発、産業連関分析のベテラン研究者である。中国の名門大学である中国人民大学に留学し、博士号取得後、アジア経済研究所（現独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所、以下、アジ研）の研究員を経て、現在大東文化大学国際関係学部国際関係学科教授を務めている。アジ研在籍中には、「アジア国際産業連関表の作成と分析」、「中国の地域間産業連関表の作成と分析」事業を含む、数多くの国際共同研

究プロジェクトでマネージャーを務めた。また、日本と中国それぞれがもつ国内の地域間産業連関表を国際的にリンクし、世界初の「日中地域間アジア国際産業連関表」の作成事業をもリードした。アジ研勤務の傍ら、財務省財務総合政策研究所中国研究会委員、国連アジア太平洋統計研究所講師、埼玉大学経済学部非常勤講師としても活躍し、大東文化大学に転籍後は、国交省国土交通政策研究所アドバイザー、中国オーストラリア政府プロジェクト国際アドバイザーおよび中央大学経済研究所客員研究員をも務めた。著者は中国の方言も堪能で、中国の地域経済を肌で知る専門家といっても過言ではない。

以下では本書の内容を紹介するとともに、その意義・貢献を評価し、また使われる概念や方法に関連して、若干の議論を行う。

I 本書の紹介

本書の構成は以下のとおりである。

序 章 中国の地域経済をどう理解するか？

第1部 分析視角

——産業連関モデルとデータ——

第1章 地域と地域間産業連関モデル

第2章 地域と地域間の産業連関データ

第2部 空間経済の形成と構造

——集中と拡散——

第3章 空間経済の形成

第4章 中核の構造

第5章 中核と周辺の相互作用

第3部 地域経済と国際経済の統合

第6章 海外との相互依存

第7章 経済統合

終 章 総括と課題

上記からわかるように、本書は序章と終章を除き、3部構成をとっている。第1部では本書の分析視点である地域間産業連関モデルおよびそのデータについて述べられている。第2部では、中国経済の空間構造と相互依存について詳しく解説している。第3部では、中国国内地域と海外とのリンケージについて紹介されている。本論の最後に言語別（和文、中文、英文）の参考文献、あとがきおよび索引が付されている。

本書は、分量の割にA5判で264ページとハンディである。計量分析の結果に基づく部分が多いが、第1部以外に数式はほとんどない。従来なら、この種の内容に対しては、大量の数式が使われるのが一般的であり、数式を極力抑えてしかもわかりやすく解説するのは相当の文章力が要求される。本書を読む限り、数式の代わりに図表と文章をうまく組み合わせしており、非常にわかりやすく、初心者にはもちろん、同領域の専門家にも使いやすく工夫されている。

序章では、まず読者に期待感をもたせるため、「中国の地域経済をどう理解するか」という質問が投げられる。この問いに対する回答は、トーマス・フリードマンの有名な「世界はフラットである」という言葉の曖昧さへの批判・展開から始まる。空間的に集中する経済活動の実態に基づき、著者は中国の地域経済はフラットではなく、むしろ「デコボコ」であると主張している。続いて、この「デコボコ」を経済学的に深掘りして分析することで本書を既存の中国地域研究と差別化し、これを本書のオリジナリティとして提示している。特に分析視角として「海外」「中核」「周辺」という枠組みを導入し、これをうまく地域間産業連関モデルで表現し、経済活動の不均一性および各構成要素間の相互作用を把握することが本書の最大の特徴と説明されている。本章の最後で本書の構成について簡潔かつ平易に紹介されている。

2つの章からなる第1部では、本書の分析視角である地域間産業連関モデルおよびそのデータに関する説明をまとめている。第1章では多少数式が使われるが、1地域2財の産業連関モデルから始まり、2地域2財の地域間産業連関モデルまで非常に単純明快に一国多地域の国民経済の枠組みを解説している。また、産業間や地域間の生産ネットワークを通じた波及効果についても伝統的な産業連関モデルにおける前方連関と後方連関から乗数効果の分解によるSpillover効果の概念までわかりやすく説明を行っている。初心者でも、短期間に一国の経済における消費者と生産者との経済的やり取り、地域間、産業間の財・サービスの流れについて理解・把握することが可能である。読みやすさの観点からみると、産業連関分野で著名なMiller and Blair [1985] の教科書と非常に似ていることは印象的である。

地域間産業連関モデルの有効性が第1章で強調された後、モデルに必要なデータがどれだけ入手できるか、また入手できない場合にいかに科学的に推計するかについて第2章で紹介されている。中国は国際経済に統合されつつあるとはいえ、比較的データ制約の高い途上国（そして移行経済国）である。最近になってからようやく地域レベルの産業連関データが公開された経緯もある。ただし、本章で指摘されたように、単独の地域表から地域間産業連関表を作成することは決して容易なことではない。作成の際には地域間の財・サービスのやり取りに関する情報は不可欠となるが、日本でさえこの種の情報は完全に入手することが難しいため、中国については現時点ではSurveyベースの情報は極めて少ない。本章はこのようなデータ制限について説明したあと、Non-survey的に地域間交易量を推計する手法を紹介している。また、具体的に地域表と地域間交易情報とを合わせていかに地域間産業連関表が作成されるかについても、これまでの著者による中国関連の実証研究の成果に基づき解説がなされている。この章は統計的概念になじみのない初心者にとってやや負担になるかもしれないが、どちらかという産業連関表の作成および情報推計に興味のある読者には参考の好材料になる。

本書のコアとなる第2部は3つの章からなる。第3章は、まず中国の地域経済発展の歴史的経緯の説明から始まる。そこでは、相対的にどの地域が中心となって発展してきたかに注目し、地域経済発展のプロセスを「計画経済期（～1978年まで）」、「改革開放期（～1999年まで）」と「地域協調発展期（1999年以降）」と大きく3つの段階に分けて解説を進める。内容的に時間・空間・産業という3次元のアプローチに史実、事例、参考文献、統計データをうまく取り入れ、複雑な中国地域経済発展史を非常にわかりやすく凝縮した形でまとめている。続いて、地域経済発展の過程で「格差」と「産業集積」に焦点をあて、空間構造のダイナミズムを地域間産業連関モデル（1987～97年）による結果を用いて説明している。使われる経済学のインディケーターはジニ係数、産業集積指数、後方連関指数、生産誘発依存度など一般の教科書でも紹介されるものであるが、どれも空間的な視点が加えられて、中国の地域間生産ネットワークと市場構造を解説するところが本章の

特徴である。結論として沿海地域は中核、中部や西部は周辺と位置づけられ、中核は周辺の生産を誘発し、周辺は中核の生産を支えるという従属的な空間経済構造が明らかにされている。

ここまで進むと読者は自然に、沿海はなぜ中核になり得たのか、中核の内部構造について興味をもつようになるだろう。これに答える形で、第4章では、立地などの地域的特性、産業の多様性および相互依存性の指標を用いて中核地域の特徴が分析されている。産業の多様性と立地要因の説明ではシフトシェア分析の手法が使われている。当該手法を使うことによって産業構成による貢献と地域の固有要因による貢献が地域の経済発展にどれだけ重要であったのかを評価することが可能となる。計量的分析結果は図表の形で1991～2001年、2000～2005年、2005～2009年という3つの期間に分けて整理されている。続いて、クルーグマン・藤田流の空間経済学における集積の概念やハーシュマンに代表されるリンケージの概念を再考しながら、質的産業連関モデルを中国の地域・産業の相互依存性の説明に適用し、中核となる東部沿海と南部沿海の地域内と地域間リンケージを明らかにしている。従来の産業連関分析の結果の示し方と比べ、本章では読者が直観的に受け入れやすいビジュアル的な図形を利用するのが印象深い。また産業集積とリンケージの概念を整合的に地域間産業連関モデルの枠組みの中で説明する試みは目新しく、同分野の研究者にとって刺激的といつてよい。

中核の構造が論じられる第4章に続き、第5章では中核と周辺との相互作用について分析が展開されている。この章ではまず先進地域と後進地域を二分化する概念、中核と周辺を基準にその相互作用を論じてきたハーシュマンの「浸透効果」、「分極効果」、世界システム分析で提示されたウォーラステインおよび新しい経済地理学の研究成果を整理している。これらの空間的相互作用に関する先行研究を踏まえ、地域間産業連関モデルに基づくネットワーク分析を中国の省レベルの地域へ適用した研究事例が紹介されている。そこではネットワーク上多くのリンクをもつ「中心性」としてのノード(省)と、どの省を通じて多くの省とつながるかを示す「媒介性」を質的産業連関分析の手法で定義し、省間の財・サービスのやり取りを通じた空間的相互作用の

様子を図表の形で再現している。計量分析の結果から中核と周辺に属する省の識別が可能となり、またその時系列的変化パターンも明らかにされている。さらに、中核地域への生産集中がみられ、利潤が周辺から中核に移転するものの、その力は弱くなっており、徐々に浸透効果が分極効果を上回りつつあることがわかった。最後に、この章はネットワークを識別・把握するに留まらず、ネットワーク上に生じた生産、雇用、付加価値の計測を通じて中国の地域発展におけるSpillover効果や格差の問題にまで議論が展開されている。

ここまで本書は中国の国内空間を分析対象として、最新の地域間産業連関分析手法を使って中核と周辺との相互依存関係を明らかにしてきた。いうまでもなく、国内空間は独立に存在するシステムではなく、経済のグローバル化の進展により、海外とのつながりはますます強くなる一方である。結果的に国内の経済空間と海外の経済空間との間に、国際的生産ネットワークを通じた相互作用が増大する。このような現象を説明するため、第3部の前半(第6章)では、世界金融危機を事例に海外と中核、そして周辺という3層構造を「日中地域間アジア国際産業連関表」から確認するとともに、中央政府の世界金融危機への対応が中国の地域経済に与えた影響に関する分析が紹介されている。分析結果によれば、金融危機の影響は中国沿海部の輸出減少をもたらしたが、意外にも内陸部への影響の拡大は中部地域などにとどまり、むしろASEAN、韓国、台湾、日本の生産減少をもたらしたという。また金融危機に対応するための4兆円内需拡大策は、内陸部の経済成長を促し、東部沿海の外需減少を補うことができたが、南部沿海だけは外需依存度が高すぎたため、刺激策による景気回復には時間がかかることが示された。この研究成果は金融危機後に素早く論文として発表され、その後の中国経済の実態と照らしてみると、非常によく当てはまると思われる。従来の国際産業連関分析と比べ、中国の国内地域が完全に内生化したモデルを利用し、国内経済空間と国際経済空間との相互依存関係をうまく把握できたことは本章の特徴である。

第7章では、中国の国際市場との経済統合を、国内統合からの延長と位置づけ、海外との経済統合の結果、中国の地域経済は今後どうなるかを展望して

いる。そこで、まず中国の国内経済統合について、市場分割の事例を使いつつ、その歴史的経緯と現状を紹介している。続いて、中国のWTO加盟後のFTA締結のプロセスに沿って国際経済への統合の歩みを事例と理論の両面からまとめている。そして、経済統合を検証するため、産業連関に基づく要因分解法を使って、国間の相互作用を自国内乗数効果、国間のスピルオーバー効果（自国から複数の他国へ波及していく効果）およびフィードバック効果（自国から複数の他国を経由して自国に戻ってくる波及効果）と分けてシミュレーション分析が展開されている。実証分析の結果によると、中国へのさらなる生産集積あるいは生産拡大とアジア地域の中国依存への増加が確認される。また海外が中核－周辺を抱える中国経済と統合を進める結果、統合の効果は中国に有利に働く可能性があると指摘されている。さらに、中核－周辺の格差縮小につながる可能性も言及されている。

終章では本書の総括および今後の課題が述べられている。総括部分において、まず中国の地域間産業連関モデルについて限界やデメリットを論じながら、本書のオリジナリティと優位性を強調している。次に第2部、第3部で議論してきた中国地域経済の状況についてまとめている。最後に本書の限界および課題について、以下の3点に絞って指摘されている。第1に、本書で使われる分析フレームワークは全空間（国内地域と国際）を統合したモデルではないことである。第2に、生産の集積地、すなわち中核地域が中核たる条件はどういうものかを、はっきり指摘していない点と、周辺地域の特徴やなぜ後れているのかといった分析が十分にできなかったことである。第3に、地域間格差の発生および変化のメカニズムと空間的相互作用との奥深い関連性についての議論はなお不十分なところが残っている。これらの限界も著者が指摘したとおり、中国の地域経済発展を理解するうえで、今後の有益な研究テーマになると思われる。

II 本書の意義・貢献

本書の意義・貢献として以下の4点が挙げられる。

まず、中国経済を理解するうえでの空間的相互作

用の重要性をわかりやすく解説している。たとえば、これまで中国の地域経済研究では所得格差とその原因究明が非常に重要なテーマのひとつとされてきた。しかし、著者が指摘するように、地域経済は中国全体の経済を構成しており、それらが相互作用をおこしながら格差の縮小・拡大を変えていく。したがって、地域間格差の研究に限っていても地域間の相互作用への理解は欠かせない。

次に、本書は地域研究における従来の分析視角を意識しながら、新たな分析の枠組みを提示した。つまり、従来の地域、省レベルの区分のみではなく、「海外」「中核」「周辺」という概念を導入し、中国全体という空間の中で各地域の経済密度が、海外も含めた形で相互依存関係を通じて、拡散・収束、集積・分散、統合・分裂といった過程に分析の焦点を当て、現実の中国の地域経済発展の歴史的経緯に照らしながら分析が進められた。

また、本書は空間に存在する各地域の取引を産業レベルで記載したデータベースである地域間産業連関表を十分に活用し、上記の「海外」「中核」「周辺」という枠組みにうまく当てはめ、中国における中核地域の経済成長の様子を把握しながら、それに伴う周辺地域への経済的影響を生き生きと示すことに成功した。

最後に特筆すべき点は上記の第3点目とも関連するが、本書は中国の国際市場との経済統合を国内統合からの延長と位置づけて、従来の地域研究の枠組みをさらに拡張し、経済のグローバル化と一国の国内地域レベルの経済システムとの相互作用を明らかにしている。これは国際化の進展により経済的国境がますます薄くなるなか、一国内の経済空間とグローバルな経済空間を内生的にリンクさせ、システムティックに地域経済を分析する先駆的研究といえよう。

今後の課題について、すでに著者自ら指摘した内容に加え、以下の4点を指摘したい。まず、時間軸に関して、産業連関データによる制約があるかもしれないが、時系列（年ごと）の分析まで補完情報があれば、本書の結論の頑健性に関する検討が可能となる。次に、産業レベルの議論は一国および一地域の産業政策にとって非常に重要であるが、企業レベルの議論とのバランスも今後の課題として残っている。産業はどちらかというと企業の集まりであり、

統計上で統一化したカテゴリーにすぎず、同産業内の企業の異質性（規模、生産性、技術、オーナーシップ）への配慮は中国の地域経済を理解するうえで重要な問題である、と評者は考える。さらに、空間相互作用はサプライチェーン、バリューチェーンの観点からも解釈可能であり、最近、この分野での蓄積も急速に増えてきたため、今後のテーマとして期待したい。最後にあえていうと、ここまで深く中国の地域経済について産業連関モデルを応用した以上、環境問題への拡張も不可能ではなく、この点に大いに期待したい。

概して、本書は中国の地域経済を時間・空間・産業という3次元の視点から実際の地域発展政策の歴

史的プロセスに沿って、非常に読みやすい書である。また伝統的な産業連関モデルによる計量分析の結果に基づく部分が多いが、最新のインディケーターを有効に組み合わせながら、議論をビジュアル的に展開した点は読者にとって刺激的であると思われる。

文献リスト

Miller, Ronald E. and Peter D. Blair 1985. *Input-Output Analysis: Foundations and Extensions*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.

（アジア経済研究所開発研究センター）